

【書評】

神奈川大学人文学研究所（編）

『歴史と文学の境界』〈金庸〉の武侠小説をめぐって

笹倉 一 広（一橋大学大学院経済学研究科助教授）

本書は2001年11月、神奈川大学において3日間行われた「神奈川大学人文学研究所・浙江大学日本文化研究所共催、第11回国際学術シンポジウム〈歴史と文学の境界〉」での報告・発言をまとめたものである。副題が示すとおり、このシンポジウムの目玉はなんといっても、初日、金庸氏を迎えての「金庸作品の魅力」と題した討論であった。本書もそれに応じて、2部構成の前半に「〈金庸〉の武侠小説」と題し、初日のパネラーの論文5篇を配し、後半に「歴史と文学の境界」に関わるその他の論文5篇を配している。

金庸氏（1924年生）は武侠小説の第一人者である。武侠小説とは、中国大衆文学の一ジャンルで、在野の武芸の達人が活躍する中国版チャンバラ時代劇ファンタジーである。このジャンルは前世紀初頭に確立したが、久しく読み捨ての通俗文学の域を出なかった。それを一変し、一般の知識人をも読者に取り込むレベルにまで高めたのが氏である。氏の作品は「中国人のいるところ必ず金庸の小説あり」と称せられるほどに愛読され、香港、台湾、中国本土では80年代に熱狂的ブームとなり、さらには韓国でも大いに読まれ、今でもその人気は衰えていない。活字ばかりでなく、テレビ・映画・コンピュータゲームなどのあらゆる方面で再生産されている。付け加えれば、金庸氏は現在浙江大学人文学院長でもあられる。

本書冒頭、鈴木陽一氏の序論では、本書のテーマ「歴史と文学の境界」の視点から、昨今我が国で高く評価されている司馬遼太郎が、史書として高い評価の『史記』の司馬遷と同じく歴史事実と歴史虚構叙述との境界に位置していることを指摘し、金庸氏もまたその境界に位置することが氏の高評価と無縁でないことをまず鋭く指摘する。

続く金庸氏による基調報告は、その境界について、事実と虚構・歴史と文学がどうあったか、またどうあるべきかが氏自身の言葉で語られている貴重な証言である。

金庸氏の小説はアメリカの大学でも国際シンポジウムが開かれ、20世紀文学における位置づけが討論されるほど世界的に評価は高いが、中国大陸では否定派も少なくない。文学革命以降、そして社会主義中国成立以降は一層顕著になった、文学は使命を持ち向上しなければならず、武侠小説は芸術的にも思想的にも遅れた低い物と位置づける見方が根強いのである。

金庸氏の基調報告のあとに置かれた廖可斌氏、陳平原氏の論文はいずれも金庸氏を評価する立場からの論である。廖氏の論文では、擁護派・批判派それぞれの視点が分りやすく整理されている。廖氏は金庸氏の小説は伝統文学の形式をとりつつも、西洋文学的技法と観念が盛り込まれ、思想的にも現代人の観点を反映しているものとして評価する。

陳氏は、ペンネームの金庸ではなく、本名の査良鏞で論を進めていることに象徴されるように、金庸氏の人物を中心に評価し、氏を「政治的理想を持った小説家」ととらえ、その作品に見られる雅俗を超えた「政論家の見識」「史学家の教養、歴史把握能力」「小説家の想像力」の発現を評価する。これには、金庸氏にとって武侠小説はむしろ余技で、本業は『明報』という新聞社を主宰し、鋭い政治評論を書く記者であったという背景がある。

続く岡崎氏は、廖・陳両氏の「正統的・伝統的」な文学の質・文学的価値からの議論を離れ、大衆小説としての武侠小説の文体に対する認識が論争の遠因となっていることをまず指摘し、次いで金庸・古竜の作品の格闘描写部分の文体（むろん中国語原文）の実際を具体的に分析検証して見せる。そして、その文体が旧白話を脱して変遷し、現代の大衆小説としての叙述手法を十分に備えていることを明らかにしている。岡崎氏は金庸・古竜の武侠小説の翻訳を数多く手がけ、また叙述方法の分析の研究家でもあり、その手際の良い分析には、上質なエンターテインメントとしての読み方も披瀝され、小気味よさを感じた。

金庸氏の武侠小説は、日本では90年代後半に紹介されたが、一部には熱烈に歓迎されたものの、広く受け入れられるには至っていない。このことについて、最後の金文京氏の論文は、日本には独自の時代小説があること、武侠小説の主な舞台である清朝文化に対する理解の不足、さらに最も重要なこととして、日本人の中国に対する歴史および社会認識の不足を指摘する。そして、歴史と文学の境界に立つ金庸を娯楽とは別な角度から読むことを勧める。韓国を母国とする氏ならではの、われわれにはなかなか持ち得ない広い視野からの提言である。

第2部については手短かに述べるが、中で小林氏の論文は日中の社会・文化の違いを、中国の民衆運動と日本の百姓一揆の比較を中心に論じて興味深い。小林氏は中国民衆運動の特質として「皇権主義」「秘密結社・武装結社」「神憑り」の3点を指摘し、またそのいずれもが日本には見られないとする。特に後2者は武侠小説の特徴にも一脈通ずるものである。さらに、武侠小説の先祖とでも言うべき『水滸伝』が日本に紹介され人気は博したものの、実際の民衆運動には影響を与えなかったことも氏は指摘する。これらは武侠小説が日本で本格的に受け入れられないことに対する、中国文学研究者以外のからの思いがけない示唆に富んだ指摘である。小林氏の論考は武侠小説を念頭に執筆されたものではもちろんないだろうが、図らずも上述の問題に対する一つの解答を提示している。広く各方面の研究者が論を持ち合って作られている本書を読んでこそその収穫であった。